

「近者説、遠者来」

岐阜県立森林文化アカデミー 教授 ● 川尻 秀樹

● アワニー原則って知ってますか

自動車産業に依存して成長してきたアメリカ経済。それが招いた都市とコミュニティの崩壊。この現実には危機感を抱いた地方自治体の幹部や専門家が、1991年（平成3年）カリフォルニア州のヨセミテ国立公園のホテル・アワニーで、持続可能なまちづくりのための原則を提唱しました。

アワニー原則では、アメリカの抱える社会問題はコミュニティの崩壊によってもたらされ、その崩壊の原因は自動車に過度に依存したエネルギー大量消費型の都市づくりに起因すると結論づけています。そして解決策としては、自動車への過度な依存を減らし、生態系に配慮し、何よりも人々が自ら居住するコミュニティに対する強い帰属意識と誇りが持てるような都市を創造することだとしています。

● 日本も同じでは？

この背景には、日本でもよくある大企業誘致による失敗があります。地方での雇用拡大のため、地方税を稼ぐためと、地方自治体が大規模に工業団地を開発整備し、大企業の誘致を進めてきました。しかし企業の業績が悪くなれば工場は閉鎖され、大量の社員が解雇される。結果として分かったのは、企業を誘致して産出される利益よりも、企業を誘致するまでに要する経費の方が大きいこと。そして何よりも企業撤退により、地域のコミュニティが崩壊した現実です。

● 目指すはコンパクトシティか

1980年代の、自動車産業中心の郊外開発に対する批判から、ニューアーバニズム憲章（1996年）がまとめられました。ここでは伝統的な価値が、アメリカの大都市の目指す新しい都市像を支えるものとして再評価されています。

伝統的価値とは、単に古き良き時代への懐古ではなく、質の高い文化やコミュニティには時代を超えた価値があるとするものです。こうした価値観に基づき新しい都市づくり、まちづくりの動きを総称してニューアーバニズムと言います。

日本でも、郊外化は既存の市街地の衰退以外にも多くの問題を抱えるとして、住宅や公園、学校、店舗、公共サービス施設、職場が公共交通機関から歩いて行ける範囲に配置されたコンパクトシティ構想が、稚内市や青森市、仙台市、神戸市などで取り組まれています。

● 昔の日本こそコンパクトシティ

よくよく考えてみれば、昭和初期までの日本は、多くの地域がコンパクト

シティだったと思いませんか。

昭和初期までは里山や寺社林など周辺の自然が都市を取り巻き、都市と農村が交流することで、豊かな環境と文化、地域コミュニティが維持できてきたのです。都市周辺の山村のお陰で、都市が栄えるということを忘れてしまったのではないかと。

岐阜県内でも地域が持っていた文化や知恵、人間関係の価値がおろそかにされ、どこもかしこも同じような郊外化が見られます。

● 自分自身の生活を見つめる

論語に「子曰、近者説、遠者来」近き者説（よろこび、遠き者来（きた）る。というものがあります。

これは近くの者が喜ぶような政策をすれば、その評判を聞いて遠くの者が集まってくるという意味です。

私たちが目指すものは、単に目新しい技術開発でもなく、単なる企業誘致でもない。今まで置き去りにしてきた岐阜の地元企業や優秀な人材、豊かな伝統文化や環境。これらを活用して、地元の人たちに喜んでもらえる社会を構築することではないでしょうか。

私は目の前に広がる農地と山を眺めつつ、自分の暮らしを見つめ直し、「本当の豊かさとは何か」を自分自身に問いかける心の余裕と時間を持ちたいと考えています。